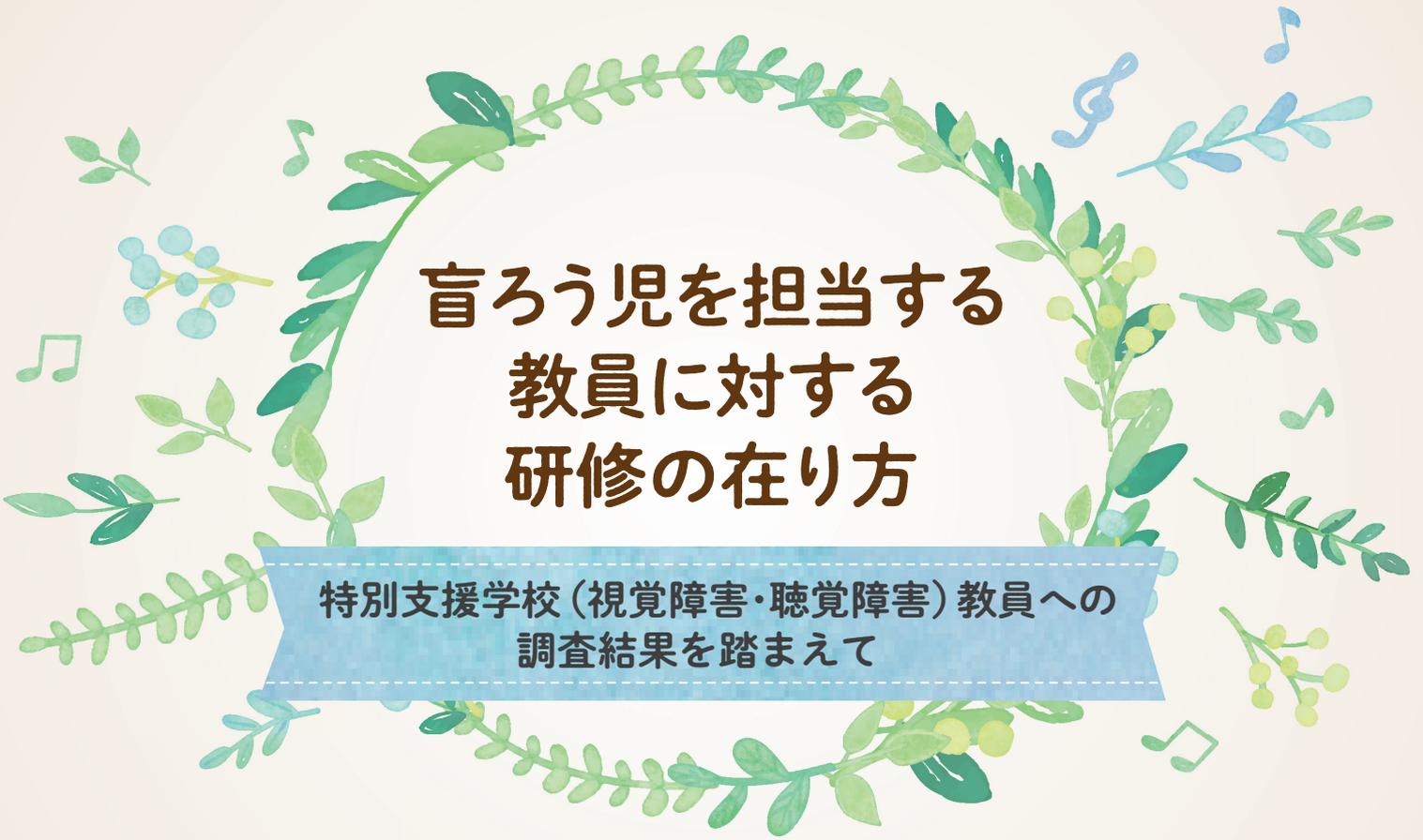


「盲ろう児に対する指導の在り方にかかわる調査研究」最終報告書



# 盲ろう児を担当する 教員に対する 研修の在り方

特別支援学校(視覚障害・聴覚障害)教員への  
調査結果を踏まえて

令和7年3月

国立大学法人 大阪教育大学

特別支援教育部門 研究代表者 早野眞美



## はじめに

「令和の日本型教育の構築を目指して」(令和3年1月)の中で、「特別支援学校に教師の求められる専門性」について、「障害のある子どもの一定数が複数の障害を重複していることを踏まえた対応が必要である。例えば、障害者権利条約第24条において示されている通り、盲ろうの障害に関し、最も適切な教育が行われるべきことが求められているが、実際に盲ろうの障害を有する子供は、情報の入力や出力の観点から補完関係にある視覚と聴覚の両方に障害があるため、盲ろうの障害の独自性に合わせた指導事例の収集や、指導や支援のポイントの整理等を進めるなど、専門性の高い教師の育成を支えていく必要がある」と述べられています。

このように近年、特別支援教育において、盲ろう児への教育支援の在り方が重要な課題として注目されています。盲ろう児は視覚と聴覚の両方に障害があることから、その教育支援には高度な専門性と細やかな配慮が求められます。本研究では、全国の特別支援学校(視覚障害・聴覚障害)における実態調査において、盲ろう児教育における課題が浮き彫りとなりました。

調査対象となった175校の特別支援学校(視覚障害・聴覚障害)のうち、34校、計52名の盲ろう児が在籍していました。これらの幼児児童生徒の障害の状態は、全盲ろう、盲難聴、弱視ろう、弱視難聴と多様で、多くは弱視難聴であることが分かりました。それぞれの障害の状態に応じ、各学校では担当者が中心となり、担当者で支援・指導を行っていることが多く、適切な教育支援や知識が求められています。なお、アンケートの回収率は61.7%であることから、実際の在籍数はさらに多いと推測されます。同時期に全国の特別支援学校を対象とした特別支援教育総合研究所の調査では、1025校のうち166校、315名が在籍しているとの報告をされています。同様に弱視難聴の幼児児童

生徒の割合が多いという結果でありました。

また、調査結果から、教育相談等で、他障害の特別支援学校と連携している割合は、5.9%(34校中2校)と少なく、特別支援学校(視覚障害)と特別支援学校(聴覚障害)の連携が極めて限定的であることがいえます。また、34校のうち11校について訪問調査を実施したところ、担当教員についても、特別支援学校(視覚障害)および特別支援学校(聴覚障害)、いずれも経験していた教員は9.1%と少なく、特別支援学校(視覚障害)の担当教員は、聴覚障害教育の知識が得られにくい状態であり、逆に特別支援学校(聴覚障害)の担当教員は、視覚障害教育の知識が得られにくい状態であることが確認されました。

また、盲ろう児の受け入れに際しては、弱視難聴といった障害の程度が重度ではない児童生徒への視点を含めて、視覚障害教育・聴覚障害教育、双方の実態把握の方法や教育における知識等を確認できるものの必要性が示唆されました。

本研究では、このような課題に対応するため、盲ろう児に対する指導実践の実態や課題を整理し、担当教員への指導方法や研修事項を体系化することを目指しました。この報告書においては、アンケート調査による盲ろう児の実態をまとめ、アンケート調査や訪問調査から実態把握や知識を確認できる『盲ろう児チェックリスト』、教員向け研修プログラムとして教員対象の研修動画を作成しました。

本研究の成果が、盲ろう児の在籍する学校の教職員の方々に活用していただけますと幸いです。

最後になりますが、アンケート調査・訪問調査にご協力いただきました特別支援学校(視覚障害・聴覚障害)の教職員の皆様、研究動画資料を作成いただきました加藤先生、中川先生、稲垣先生、内館先生に感謝申し上げます。ありがとうございます。

## アンケート調査の結果

03

調査の目的および内容

調査の概要

盲ろう児の在籍校の状況

盲ろうのタイプの概要

実態把握について

校内の歩行の状況

課題に感じること（アンケート結果から主なものを抜粋）

## チェックリスト

07

チェックリスト作成の経緯

盲ろう児童生徒（弱視難聴）への取り組みチェックリスト

チェックリスト解説

1. 実態把握について
2. 学習面について
3. 歩行面について

## 研修プログラム

13

第1回 盲ろう教育の基礎① 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 加藤 敦氏

第2回 盲ろう教育の基礎② 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 加藤 敦氏

第3回 盲ろう教育の実際 横浜訓盲学院 中川 はすみ氏

第4回 肢体不自由を伴う盲ろう幼児の教育実践  
—乳幼児早期支援と幼稚園での取組み— 横浜訓盲学院 稲垣 瑞穂氏

第5回 盲ろう生徒の自発的ないし表出につながる  
コミュニケーションスキルの獲得について 横浜訓盲学院 内館 愛氏



# アンケート調査の結果



## 調査の目的および内容

### 調査目的

特別支援学校（視覚障害）及び特別支援学校（聴覚障害）における盲ろう幼児児童生徒（以下、盲ろう児）の在籍実態を明らかにした上で、盲ろう児を取り巻く指導上の課題について明らかにすること。

### 調査内容

**調査対象** 全国の特別支援学校（視覚障害） 67校  
全国の特別支援学校（聴覚障害） 108校

175校

**調査期間** 令和5年12月～令和6年1月

**調査方法** 郵送による質問紙調査（令和5年5月1日現在で回答）

**調査項目** 調査① 全ての特別支援学校（視覚障害・聴覚障害）対象  
盲ろう児の在籍の有無・回答者の基本情報・在籍していない場合の課題に感じること等

調査② 調査票①において、盲ろう児が在籍している学校のみ回答  
■在籍盲ろう児の実態  
学部・学年・疾患および障害の状態・指導体制・指導上での工夫・課題に感じること等



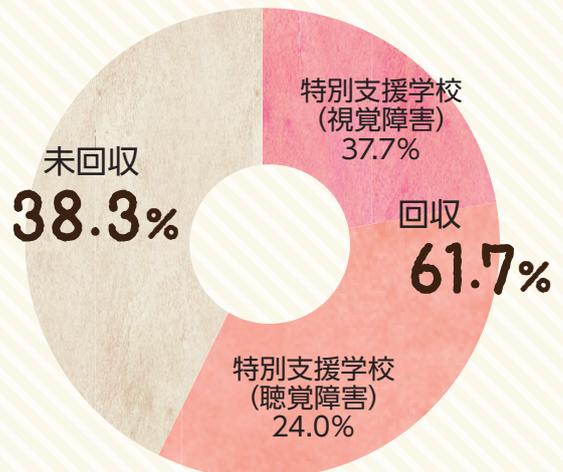
## 調査の概要

### 調査票 回収数（率）

■**発送数 175校**  
特別支援学校（視覚障害） 67校  
特別支援学校（聴覚障害） 108校

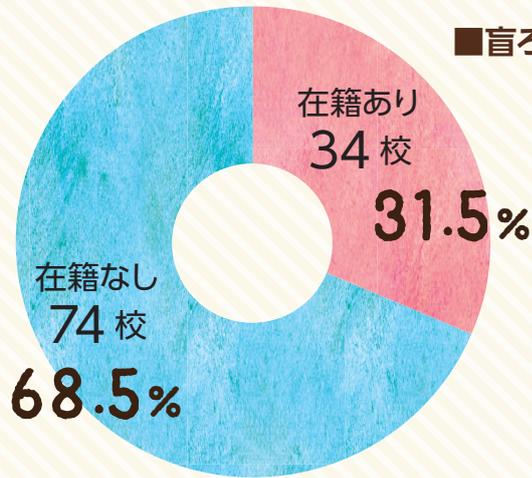
■**回収数 108校**  
特別支援学校（視覚障害） 42校  
特別支援学校（聴覚障害） 66校

■**回収率 61.7%**  
特別支援学校（視覚障害） 37.7%、  
特別支援学校（聴覚障害） 24.0%





## 盲ろう児の在籍校の状況



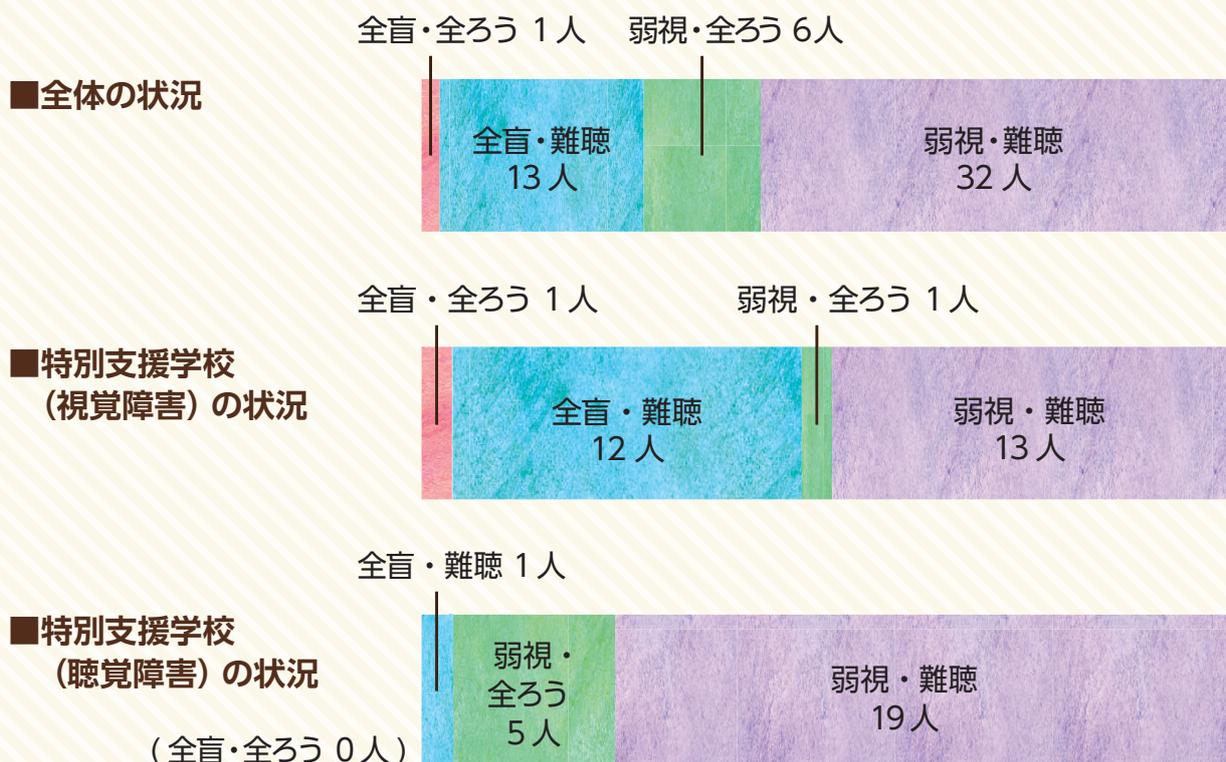
- 在籍している 34校 52名
  - 特別支援学校（視覚障害）13校 27名、12.0%
  - 特別支援学校（聴覚障害）21校 25名、19.5%
  - ※在籍率（n=108）：31.5%
- 在籍していない：74校（68.5%）



## 盲ろうのタイプの概要



在籍盲ろう児の盲ろうのタイプ（全盲・全ろう/全盲・難聴/弱視・全ろう/弱視・難聴）は、特別支援学校（視覚障害・聴覚障害）全体と、特別支援学校（視覚障害）、特別支援学校（聴覚障害）別に集計した結果、弱視・難聴の盲ろう児が多かった。

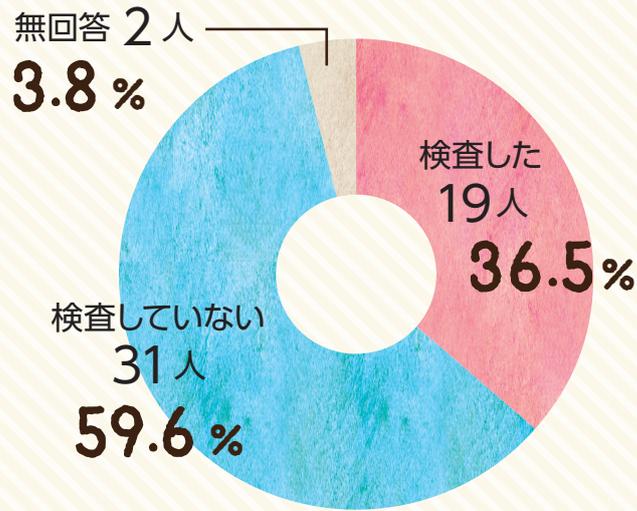




## 実態把握について

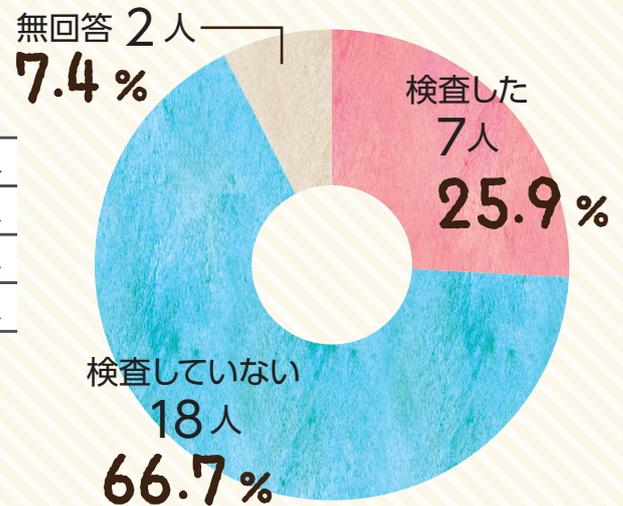
特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）では、検査等の実施は、特別支援学校（聴覚障害）の方がやや実施が多かった。使用されている検査は、特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）で違いが見られた。

### ■全体の状況



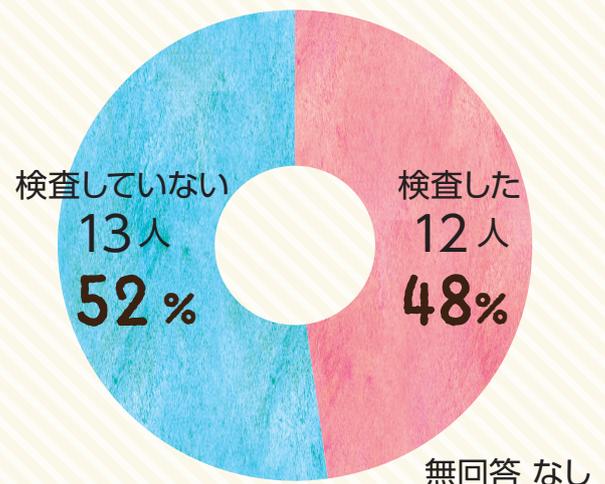
### ■特別支援学校（視覚障害）で使用されていた検査

広D-K 式視覚障害児用発達診断検査	3人
新版 K 式・K 式発達検査 2020	1人
S-M 社会生活能力検査	1人
MEPA-II R	1人



### ■特別支援学校（聴覚障害）で使用されていた検査

絵画語彙発達検査	5人
新版 K 式・K 式	2人
読書力診断検査（教研 ReadingTest）	2人
JCOSS	1人
WISC-IV VCI145	1人
広D-K 式視覚障害児用発達診断検査	1人





## 校内の歩行の状況

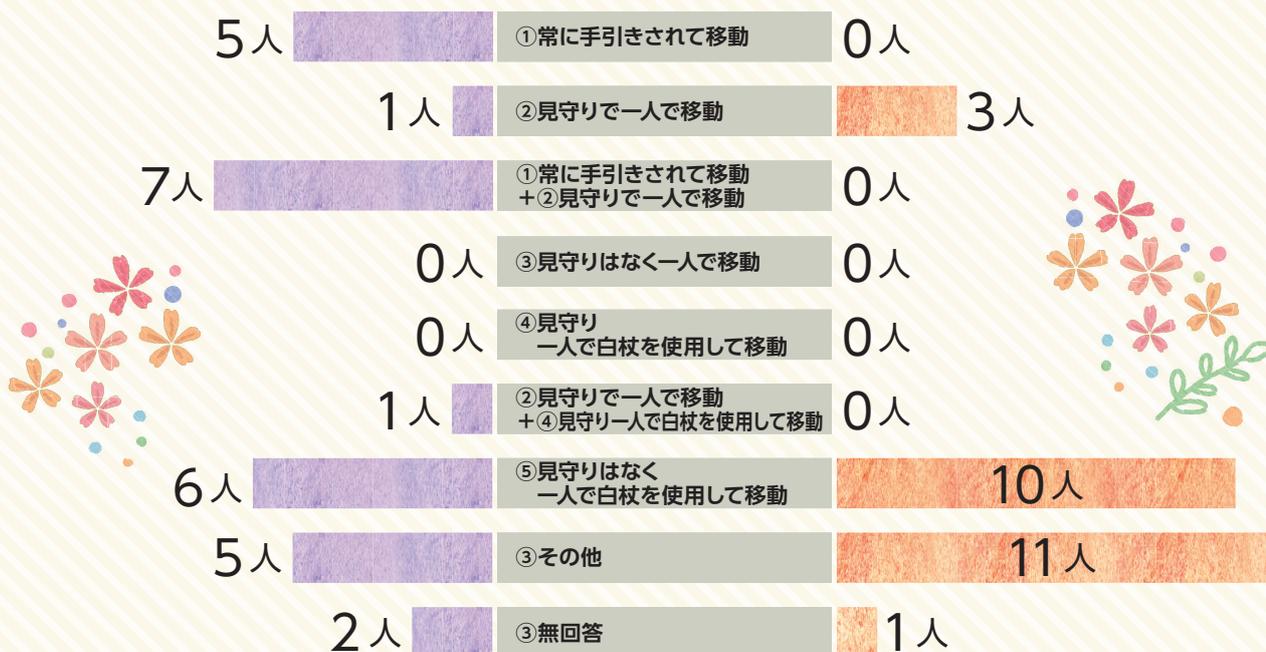
校内の歩行の状況は、特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）で違いが感じられた。特別支援学校（視覚障害）では、全盲ろう、全盲難聴の児童生徒も多く在籍していることから、手引きや見守りでの移動も多かった。

特別支援学校（聴覚障害）では、弱視全ろう、弱視難聴の児童生徒が多く在籍していることから、見守りはなく一人で白杖を使用して移動と、その他（見守りはなく白杖などの補助具を全く使用しないで歩行や、見守りで白杖を使用しないで移動）の回答が多かった。

特別支援学校（聴覚障害）の他の児童生徒は視覚に障害がないため活発に行動することが考えられ、他の児童生徒への見えにくいことへの周知等の配慮がなされているか確認する必要が感じられた。

### ■特別支援学校（視覚障害）

### ■特別支援学校（聴覚障害）



### 課題に感じること (アンケート結果から主なものを抜粋)

教員同士で情報共有を行いながら、支援方法を考えているが、専門家に見ていただきアドバイスがほしい

専門性を高める研修会

わかりやすい教室環境

専門性のある教員の確保

教材・教員の開発

重複・重度の児童生徒への対応

特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）の連携は、5.9%と少ない

# チェックリスト



## チェックリスト作成の経緯

訪問調査を実施した結果、特別支援学校（視覚障害）では、聴覚障害に対する実態把握や支援方法について、また特別支援学校（聴覚障害）では視覚障害に対する実態把握や支援方法について、情報が十分に得られていない状態が示唆された。

ここでは、特別支援学校（聴覚障害）を訪問して得られた示唆をもとに、特別支援学校（聴覚障害）に盲ろう児童生徒（弱視・難聴）が在籍した場合に有用と思われる、視覚障害教育で行われている実態把握や支援方法について、チェックリストと解説を組み合わせまとめた。

## 盲ろう児童生徒（弱視・難聴）への取り組みチェックリスト

※チェックリストの項目をチェックし、チェックがないところは次ページからの解説を活用して、実態把握や支援方法に役立てていきましょう。

### 1. 実態把握について

- |                          |                                     |                          |
|--------------------------|-------------------------------------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | ① 視覚状態の実態把握は視力以外の視野の状態や光覚障害の状態のチェック | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ② 視力検査は、遠見視力検査以外に近見視力検査や最小可読視標を実施   | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ③ 疾患は、進行性の疾患であるかの確認                 | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ④ 網膜剥離等の可能性のチェック                    | <input type="checkbox"/> |

### 2. 学習面について

#### ■弱視への支援の基本

- |                          |              |                          |
|--------------------------|--------------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | ① 拡大する       | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ② コントラストを高める | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ③ 照明を明るくする   | <input type="checkbox"/> |

#### ■教材面

- |                          |                       |                          |
|--------------------------|-----------------------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | ① プリントの文字サイズ等         | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ② 弱視用に見やすく工夫された教科書や教材 | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ③ 学用品                 | <input type="checkbox"/> |

#### ■その他

- |                          |                        |                          |
|--------------------------|------------------------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 「見えている？」と尋ねたあとに、確認している | <input type="checkbox"/> |
|--------------------------|------------------------|--------------------------|

### 3. 歩行面について

- |                          |                          |                                     |
|--------------------------|--------------------------|-------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> | ① 既知の場所と未知の場所での違いを確認している | <input type="checkbox"/>            |
| <input type="checkbox"/> | ② 様々な観点から歩行の評価をしている      | <input checked="" type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | ③ 歩行関係機関の情報提供をしている       | <input checked="" type="checkbox"/> |

## 1. 実態把握について

### 視覚障害の実態把握の基本

視機能は、視力、視野、色覚、明順応・暗順応、眼球運動、調節、両眼視等の各種機能から成り立っているが、このうち教育的な観点から問題となるのは、主として視力障害、視野障害及び光覚障害（暗順応障害・明順応障害）である（香川・千田，2009）。つまり、視覚状態の実態把握は、視力障害の観点からのみでは不十分なのである。例えば、アッシャー症候群は感音難聴と網膜色素変性症を来す遺伝性のまれな疾患<sup>\*1</sup>であるが、網膜色素変性は、網膜の周辺部から中心に向かって網膜がダメージを受ける。網膜の周辺部には杆体細胞が多くあるため、網膜の周辺部分にダメージを受け、視野が狭くなっていくと杆体細胞が働かなくなるため夜盲となる。昼間は羞明（しゅうめい：まぶしさのこと）があり、また、視野が狭くなると歩行に支障をきたす。しかし、網膜の中心窩がダメージを受けていなければ視力は良い場合もある。このように、視覚障害の実態把握では、視力障害のみならず視野障害及び光覚障害（暗順応障害・明順応障害）の実態把握も大切となるのである。

具体的な行動としては、下記のようなものがあげられる。

- **よく人やものにぶつかる**  
→視野が狭い可能性がある
- **目線があわない、ものを斜めからみる**  
→中心部分の視野が欠損している可能性がある
- **明るさの変化により、行動が遅くなることがある**  
→夜盲や羞明の可能性はある
- **色の組み合わせがおかしいときがある**  
→色覚異常の可能性はある

※視力低下以外のこれらの症状は、本人・保護者も気づきにくいので、行動観察を通じて実態把握に努めることが重要である

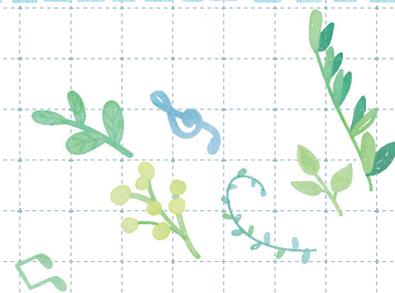
### 遠見視力以外の視力等についての 実態把握の必要性

視力検査には、5mの距離で測る遠見視力検査に加えて、30cmの距離で測る近見視力検査がある。また、特別支援学校（視覚障害）では、弱視児童生徒に対しては近見視力標を用いて、自分の見やすい距離で測定する最小可読視標（最大視認知力）も測定する。弱視児童生徒は、遠見視力、近見視力、最小可読視標、それぞれで値が異なる場合も多い。また、自分の見やすい距離まで視物を引きつけると（例えば、眼前10cmなど）、小さな文字を読むことができる場合もある。そのため、遠見視力、近見視力、最小可読視標を測定することが望ましい。なお、最小可読視標の値が適正な文字サイズの参考ともなる。年齢的にランドルト環を使用した検査が難しい場合などは、遠見用では絵視標、近見用では森実式ドットカードなど、多くの検査があり、特別支援学校（視覚障害）では、これらも取りそろえていることが多いので連携すると良い。

具体的な行動としては、下記のようなものがあげられる。

- **教科書に顔を近づけて読む**  
→近見視力を測定すると、遠見視力より低い可能性がある
- **目を細めてものを見る**  
→焦点をあわせようとしていた結果、目を細める、あるいは、目つきが悪いとみられることがある。このような場合は、屈折異常（近視・遠視・乱視）の可能性があるので、眼科での検査が必要である

※なお、眼科では口頭指示に基づき検査が行われるため、正常に検査が行われていない可能性も考慮し、医療と教育が連携する必要がある



## その他に実態把握が必要と考えられる事柄

### ① 進行性の疾患の把握と対応

前述したように、網膜色素変性症は、進行性の疾患であり、視覚障害の状態が進行する可能性がある。そのため、視覚障害の状態の把握も、毎年実施することが望ましい。加えて、進行性の疾患の場合は、将来を見据えて、現在、取り組むべき事を考えていかなければならない。例えば、網膜色素変性症の場合は、歩行面では、夜盲対策としては、フラッシュライト（懐中電灯よりかなり明るいライト）の使用や、白杖の使用、白杖とフラッシュライトとの併用、昼間であっても下り階段などでの限定的な白杖の使用法の習得、白杖の種類や購入先について知ることなど、取り組めることは多くある。このように、疾患名等から進行性の疾患であるのかを確認をして把握するとともに、進行性の疾患の場合は、将来を見据えた取り組みにつなぐことも大切なことである。

### ② 網膜剥離の危険性の把握

弱視児童生徒の中には、網膜剥離の危険性のある児童生徒がいる。また、強度の近視の場合も網膜剥離の危険性があるといわれている。そのため、特別支援学校（視覚障害）では、疾患名や近視の状態等から、保護者に確認したり、保護者を通して医者を確認してもらったりして、網膜剥離の危険性の把握に努める。網膜剥離の危険性があると確認できた場合は、特に体育などで、ボールを投げた内容の場合などは、頭部への打撲に注意が必要と考えられる。また、日常生活の歩行場面等においても、上部にあるものに頭部をぶついたり、廊下で児童生徒同士がぶつかったりして、打撲することのないように注意が必要である。そのため、このような情報は、担任のみが知っておくのではなく、体育の授業担当をはじめ、教員全体に周知することが大切となる。特別支援学校（聴覚障害）では、周囲の児童生徒が視覚に障害がないだけに、注意が必要と思われる。





## 2.学習面について



### 弱視への支援の基本

弱視への支援の基本は、①拡大する、②コントラストを高める、③照明を明るくする、である。以下、それぞれについて記す。

#### ① 拡大する

拡大は、様々な方法があるが、大きくは4つに整理される(大川原ら, 2001)。第1段階は、視物への接近である。目を視物に近づけて網膜像を大きくして認知する方法である。第2段階は、見る時だけ道具(視覚補助具)を用いて網膜像を拡大する方法であり、弱視レンズや拡大読書器、タブレット端末などを使用する方法である。第3段階は、視物そのものの拡大である。コピーによる拡大、パソコンによる拡大、立体模型の活用(昆虫などは特に有効)等がそれにあたる。第4段階は、視物そのものの映像化である。写真やスライド、ビデオ、パソコンによる教材提示がそれにあたる(遠くにある風景や物の細部などにも有効)。そして、これらの方法は、第1～第2段階が弱視(本人)側の技術であり、第3～第4段階が、指導者の側の技術と整理できる。なお、第2段階の視覚補助具については(例えば、文字を見るときルーペなど)、道具の使用練習が必要となることも大切なポイントである。特別支援学校(視覚障害)と連携して取り組んでいくと良いと思われる。

#### ②コントラストを高める

コントラストを高める工夫として、最もよく知られているのは、白黒反転である。人間の目は、白地に黒の点と、黒地に白の点を比べた場合、黒地に白の点の方が、より小さい点でも発見できるのである(大川原ら, 2001)。そのため、後の文房具の項でも触れるが、定規なども弱視用に白黒反転定規等も販売されている。プリント等は、通常、白

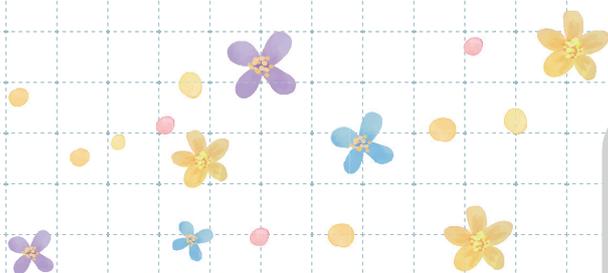
地に黒の文字で印刷されている。プリント等は、白黒反転して印刷して渡すことはインクのコストの面から現実的ではない。プリント等は、拡大読書器(視物を液晶画面に拡大して映して見ることができる機器)の白黒反転機能で電氣的に白黒反転させたり、タブレット端末にデータで表示させ白黒反転させたりして、利用するようになると良い。

また、コントラストが低い状態に注意するという視点も大切である。例えば、白い机の上に白いプリントを置くと、弱視の場合は、見えにくいことが予想される。このような場合、プリントより少し大きめの黒色画用紙をラミネートしたものを用意しておき、それに載せて渡すなどの工夫が考えられる。他の例としては、パソコンのマウスポインターも通常は白であるが、マウスポインターは、大きさや色の設定が変更可能であるので、黒色のマウスポインターを設定すればコントラストが高まる。

#### ③照明を明るくする

一般的に照明は、照度をどんどん上げていくと1,000Lux 付近までは見えやすさが向上し、この照度を越えるとプラトーに達するといわれている。したがって、弱視児童生徒への照度を考える場合、一般的には1,000Lux 程度の高い照度を確保するように考えるが、明るすぎると眩しくて見えにくくなる者もいるので、高い照度を保てばよいというものでもない(香川・千田, 2009)。また、疾患によっては、屋内と屋外、また、天候(晴天時と曇・雨天時)によっても、眩しさの度合いや見え方が変化する疾患もある。そのため、天候によってブラインドやカーテンを開けたり閉めたりして教室全体の明るさを調整するとともに、必要な児童生徒に対しては、卓上照明(デスクライト)を貸し出すなどの配慮が必要な場合もある。





## 教材面

### ①プリントの文字サイズ等について

拡大の第3段階は、視物そのものの拡大であった。プリントやプリントの文字サイズへの配慮がそれにあたる。しかし、プリントの文字サイズを大きくするといっても、どの程度大きくすれば良いかが問題となる。本人に適したプリントの文字サイズは、先に記した最小可読視標の値を元に計算することが可能である。例えば、最小可読視標の値が0.6であったとしたら、理論的には14ポイントが最適文字サイズとなる。ここでは、これらの計算式についてまでは言及しないが、最小可読視標の値から、最適文字サイズを計算できることは覚えておきたい。その上で、特別支援学校（視覚障害）と連携していくことが必要と考えられる。また、文字は明朝体のまま拡大してもみやすくはならない。明朝体は横の線が細い字体だからである。このように字体も大切であり、明朝体よりも太さのあるゴシック体や、太さもより、なおかつ隙間も確保されているUDフォント等が好まれることが多いことも覚えておきたい。



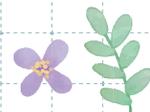
### ②弱視用に見やすく工夫された教科書や教材

弱視用の教科書としては、文字サイズが18ポイント～22ポイント（小学校3年までは発達段階を考慮して22ポイント～30ポイント）の拡大教科書がある。また、地図など、様々なデータと一緒に表記されているような場合、それぞれの情報が視覚的ノイズとなって見えにくくなるため、情報を絞り、かつ単純化して示す地図帳（例えば、山地と平野だ

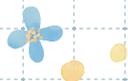
けのページなどがある）やバリアフリー地球儀などが用いられる。バリアフリー地球儀などは、常に使用するものではないため、特別支援学校（視覚障害）と連携することで、必要な時に借りることもできると思われる。

### ③学用品

学用品選定の条件は、「できるだけ見やすく使いやすいもの」というごく当たり前のことである。しかし、弱視の中には、非常に薄い見えにくい鉛筆を用いている者もかなり見受けられるし、また、見えにくい学用品であっても、それを見えにくいと訴えたりする者は非常に少ない（香川・千田，2009）。それは、見えにくい状態が、本人にとっては、普通の状態であるため、本人自身は気づきにくいのである。例えば、0.5のシャープペンシルをHBの芯で使用していた場合に、1.0のシャープペンシルで、芯を2Bのものを渡して、使用してみるように促すと、はじめて、見やすいと自覚できるのである。つまり、見やすい状態のものを示されて、はじめて、今までが見えにくかったのだと感じることができるのである。そのため、見えにくいのではないかとと思われる場合には、周囲が働きかけてみる必要もあるのである。ノートも同様である。通常のノートの罫線は、非常に薄く、また、幅も狭い。弱視用には、ビジュアルリーズ（弱視者用の太い罫線ノート）が日本点字図書館用具事業部等で販売されている。他にも、このような情報は、周囲から情報提供できることが望ましいのである。



## その他



弱視は、「見えている？」との問いには「はい」と答えることが多い。そこで、「では、〇〇はどうなっていますか？」といったように問いかけると、答えられず、改めて、問われた部分を見ようとするといったことが珍しくはない。つまり、「見えている？」との問いに「はい」と本人が答えても、見て欲しい部分を見てい

るとは限らないのである。そのため、「見えている？」との問いのみに終わらず、どのように見えているかを確認すると良い。そうすると、見るべき観点を一緒に確認できるとともに、実際には、見えていなかったり、見えにくかったりする教材なども把握できて良い。



## チェックリスト解説

### 3.歩行面について

#### 【引用文献・URL】

大川原潔・香川邦夫・瀬尾政雄・鈴木篤・千田耕基編（2001）  
視力の弱い子どもの理解と支援．教育出版．  
香川邦夫・千田耕基編（2009）小中学校における視力の弱い子供の  
学習支援：通常の学級を担当される先生方のために．教育出版．  
視覚聴覚二重障害の医療～盲ろう医療支援情報ネット  
(<https://dbmedj.org/index.html>)  
※1: アッシュャー症候群  
<https://dbmedj.org/manual/chapter/ch4-3/index.html>

#### 既知の場所と未知の場所での違い

弱視の場合は、既知の場所と未知の場所で、その歩行行動に違いが生じることも多い。つまり、既知の場所（いつも過ごしている学校内など）では、例えば、どこに、どのような階段があるかといったことを知っているため、見えにくさを感じさせることなく、行動でき、他の場所でも同様と判断されてしまうことがある。しかし、校外学習や修学旅行などで、未知の場所に行ったときなどは、必ずしも見えにくさを感じさせることなく行動できるとは限らない。むしろ、未知の場所での行動の方が歩行時における本当の見えにくさが把握できる。

とも言える。未知の場所では、下り階段で慎重な様子が観察されたなら、今後に向けた取り組みとして、階段では手摺りを持つ、あるいは階段での白杖使用練習に取り組んでいく必要性が感じられるのである。

このように、弱視の場合は、普通の学校生活の中で、既知の場所で、特段、見えにくさを感じさせることなく行動できたとしても、そのことをもって、歩行面での取り組みが必要ないと判断できるわけではないことに注意が必要である。

#### 様々な観点からの歩行の評価

歩行の評価は、様々な観点からの評価が必要である。その一つは、視力や視野、光覚障害（暗順応障害・明順応障害）、との関連から評価していくことである。歩行は、視力よりは視野に影響される。視力が良くても視野に障害があれば歩行に影響が大きいのである。しかし、そのことを知った上で、歩行時の視力、つまり見え方も評価しておくことが大切となる。視力検査は、本人が止まっていて静止しているものを見ている状態の評価である。そのため、動きながら止まっているものがどの程度わかるのかや、動ながら静止しているもの（歩きながら向かってくる自動車など）を、どの程度見えるのかを評価していくことが大切となる。更に、光覚障害（暗順応障害・明順応障害）との関連の評価も大切である。眩しさがある場合は、遮光眼鏡（まぶしい波長の光をカットする特殊な眼鏡）を検討しなければならないし、夜盲があれば、フラッシュライトの必要性を検討しなければならない。観点の2つ目は、歩行場面である。歩行場面は、

昼間の学校内での歩行に限ったことではない。夜間の外出もあり得る。そのため、夜間の様子を保護者から確認するとともに、白杖やフラッシュライトなどの必要性を判断することも大切である。また、清閑な地域と繁華な地域でも歩行には違いがでてくる。時間帯によっても、例えば混雑している時間帯とそうでない時間帯であれば、そこでも違いが生じるのである。混雑している時間帯の歩行が難しければ、時間帯をずらすという判断となる。なお、視覚と聴覚に障害を併せ有する場合は、視覚と聴覚の状態にもよるが、道路上の歩行は、自動車の回避ができるのかどうか、音響信号の利用ができるのかどうか等、安全性の確保を念頭に慎重に判断する必要があると考えられる。安全性の確保が難しいと判断されれば、道路上の歩行は、同行援護の利用も視野に入れなければならない。その場合、手引き（視覚障害者の誘導方法）のされ方に、在学時から取り組むことも大切なことと考えられる。

#### 歩行関係機関の情報提供

特別支援学校（聴覚障害）は、聴覚障害の関係機関との連携は確立され、それらの機関の情報も保護者や本人にも早くから提供されている。一方で、視覚と聴覚に障害を併せ有する場合は、視覚障害の関係機関の情報も、保護者や本人に早くから提供されることが望まれる。歩行を例としてみても、

視覚障害者の歩行に関連する機関の情報としては、歩行訓練士が所属しているリハビリテーション施設、白杖などの販売先、同行援護の事業所、などが考えられる。これらの情報も早くから提供していくことで、保護者や本人が関係機関との直接の関係を築いていくことが大切と思われる。

# 研修プログラム

調査結果の「課題に感じること」の多くに「専門家の助言がほしい」「専門性を高める研修会が必要である」という意見があり、また先進実践校への訪問等を通して、盲ろう教育の専門性や重度重複の盲ろう児童生徒への実践の知識が必要であることが明らかとなった。そこで専門家による研修プログラムを作成した。

## 研修プログラム

まとめて見られるようになっています。

<https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~tokushi/project.html>



### 第1回

#### 盲ろう教育の基礎①

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所  
加藤 敦氏

**内容**

1. 「盲ろう」の概要
2. 盲ろうの子供の教育
3. 盲ろうの子供の現状
4. まとめ

### 第2回

#### 盲ろう教育の基礎②

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所  
加藤 敦氏

**内容**

1. 盲ろうがもたらす困難さ
2. 盲ろうの子供の指導上大切にしたいこと
3. まとめ

### 第3回

#### 盲ろう児教育の実際

学校法人 横浜訓盲学院  
中川 はすみ氏

**内容**

1. はじめに：盲ろう児の学びの場
2. 盲ろう児に共通する特性の理解と教育的ニーズ
3. 盲ろう児の特別支援教育
4. 盲ろう児教育の取り組み：横浜訓盲学院（横浜地区）  
「盲ろうへの個別化支援実践」  
「盲ろう児の学習：コミュニケーションの方法（読み聞かせ・字読み）」
5. おわりに：盲ろう児支援の連続と継続

### 第4回

#### 肢体不自由を伴う盲ろう幼児の教育実践 —乳幼児早期支援と幼稚園での取組み—

学校法人 横浜訓盲学院  
稲垣 瑞穂氏

**内容**

1. 対象児（A君）の実態
2. 乳幼児期の早期支援（0～2歳児）
3. 幼稚園での教育実践（3～5歳児）
4. 就学に向けた移行支援
5. まとめ

### 第5回

#### 盲ろう生徒の自発的な意思表示につながる コミュニケーションスキルの獲得について

学校法人 横浜訓盲学院  
内館 愛氏

**内容**

1. 対象生徒（Mさん）の紹介
2. 自発的な意思表示を支えるコミュニケーションスキルとは（事例報告）
3. まとめ



令和5・6年度 文部科学省委託事業  
特別支援教育に関する実践研究充実事業「盲ろう児に対する指導の在り方にかかわる調査研究」  
研究代表：早野眞美 分担：正井隆晶・奈良里沙

発行日：令和7年3月  
発行者：国立大学法人 大阪教育大学  
住 所：〒582-8582 大阪府柏原氏朝日ヶ丘4-698-1  
電 話：072-978-3800  
編集・出版：エフキー